新　聞　2002(H14)10'03 県内総合　第3種郵便物認可

能登横断の〝地蔵街道〟

中島－福浦の山中15キロに20体

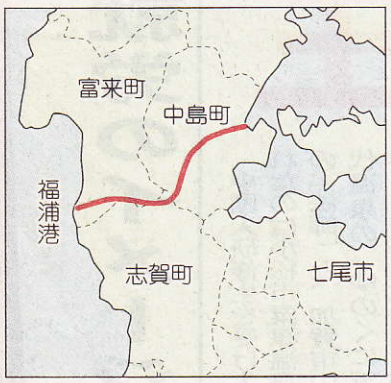
陸海の交通要所結ぶ

能登半島の外浦と内浦を最短で結ぶ中島町と富来町福浦港間の山合いに、約十五キロにわたって同形の地蔵二十体以上がほぼ等間隔に並ぶ〝地蔵街道〟が存在することが、珠洲焼資料館長の西山郷史さんの調査で分かった。地蔵の様式から、江戸後期に道標の役割と旅の無事を願って建立されたものとみられ、能登の陸路の十字路の位置を占めた中島と、日本海交易の重要港として栄えた福浦との密接な関係を裏付けるものとなる。

西山珠洲焼資料館長調査

江戸後期に建立か

〝地蔵街道〟の終点で見つかった富来町福浦の久四郎型地蔵



同型の地蔵が確認された中島―福浦間の街道ルート（太線部分）

地蔵はいずれも、天地六十―八十センチ、幅三十―五十センチの石板に、円光を背景に合掌する姿を線彫りしたもので、通称「久四郎型」。中島町浜田のものが最も厚みがあるうえ、彫り方も入念で、浜田から遠ざかるにつれ、運びやすいよう石板が薄くなっている。このため、浜田を中心に、福浦港に向かって地蔵を配置していったらしい。

地蔵は中島町の小牧、谷内、土川、富来町の福浦など二十カ所以上で確認されており、それらの位置をつなぐと、中島と福浦を結ぶ約十五キロの往来が浮かび上がる。集落に近い地蔵は地元民に親しまれてきたが、車社会となり、山間の街道が使われなくなるにつれ、個々の地蔵を結ぶ関係は忘れ去られてしまったものと見られる。

久四郎型地蔵をめぐっては、江戸後期に中島町の久四郎という人物が、自分の道楽で苦労をかけ続けた亡き妻の霊を弔うため建立したとの伝説が、同町内に残っている。

西山さんは「福浦地内では道路幅も広く、江戸時代には馬を引いて往来していたのではないか。ある程度整備すれば、観光資源としても再び光を当てることができる」と話している。